

十九世紀なかばイギリスの商品世界

1851年ロンドン万国博展示品を中心に

重 富 公 生

I. はじめに

総合的な分野での展示をおこなう万国博覧会は、つねに複合的な主旨と目的を有していた。もちろんそれは、開催者・団体の意図や時代状況などで、ある程度ことなつたものとなるであろう。P.グリーンハルジュは、ロンドン博から第二次世界大戦開戦に至るまでの大規模な万国博覧会は、およそ次の4つのテーマを共有していたという。すなわち、世界平和への貢献、広く一般大衆にたいする教育・啓蒙的役割、商業と貿易の促進、そして進歩とより良い未来というイメージの提供である [Greenhalgh (1988), pp. 17-24]。

1851年のロンドン博も、このような大規模な催しの最初の試みとして、それらのテーマすべてにかかわっていた。しかしながら、ロンドン博を研究対象としてとりあげる場合、いくつかの特定の視角から接近がなされてきた。おそらくもっともしばしば見られるのは、技術史からの接近であろう。また、その技術史をふくめたかたちで、パックス・ブリタニカの頂点の時期に開催された博覧会を、その後のイギリスの盛衰と万国博覧会の意味の変遷を視野に入れながら、いわば文明的に観察する方法も、なじみが深い。近年はむしろイギリス帝国史という枠組みの中でロンドン博が果たした機能を問題にするという視角がより一般的かもしれない。

本稿の視角は、十九世紀なかばのイギリスの商品世界を知る手がかりとして、ロンドン博の出品を見ようとするものである。すなわち、いわゆる産業革命の成果が満面開花したといわれているこの時期のイギリスにおいて、どのような商品が生産され、流通し、消費され、また求められていたのか。そしてそれらが構成する商品世界はいかなるものであり、当時の社会と経済のどのような実態を反映していたのかということ、できるかぎり多面的な視角から探ることを目的としている。

本稿で用いた資料について簡単に述べておこう。ロンドン万博では詳

細・浩瀚な公式の展示品カタログが出版されており、わが国でも近年リプリント版が出版され、ひろく利用されている [*Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851*, 4 vols. (本の友社、1996)]。それとは別に、出品者から万博の主催者に提出された出品趣意書も少なからず残存しており、独自の情報が盛り込まれている。本稿は、主として両資料の情報に依拠しているが、とくにこれまであまり利用されてこなかった出品趣意書を中心にみていきたい。出品趣意書は、万博出品にあたり出品者から主催者に提出されたもので、現在 900 ほどが残っており、マイクロフィルム化されている [*The Great Exhibition of 1851: Prospectuses of Exhibitors* (Michigan: UMI, 1991)]。趣意書の内容は多種多様であるが、万博の役員や見物の目を意識して、おおいに自社品の売り込みに努めている。なかには社屋の住所と会社のプロフィールを簡単に一枚にまとめただけのものもあるが、多くは展示品についてのカタログに掲載しえない詳細な情報、あるいは展示品以外の商品についての情報を満載している。たとえば性質や性能、価格のほかに、これまでに寄せられたユーザーの体験談、つまり商品への賛辞を掲載したものも多い。

II. 「商品市」としてのロンドン博

イギリス史において、いわゆる消費社会の生成と展開をとりあげる研究は数多いが、論者によって、消費社会の時期設定が、十六世紀、十八世紀、十九世紀などとまったく違っている。しかしそのような議論の前提となる、その時々々の社会における「商品」の総合的な集合体を示す場としては、おそらく万国博覧会は最初の本格的な機会であったといえよう。

もちろん、ロンドン博の組織者達は、博覧会を商品交換の場やフェアーとして企画したのではまっぴくなく。博覧会の目的は、商工業者にセールスの機会と場を提供することではなく、たとえば製品の完成度と洗練、生産方法の改善、長期的な国際取引の推進などをねらいとしていたからである。そして多くの製造業者達の要望にもかかわらず、展示品には価格を表示しないという原則が貫かれた [Auerbach (1999), pp. 118–9]。しかし価格が付されなかったことについては、博覧会本来の意図とは別に、いくつかの解釈がなされている。

T. リチャーズは、『ヴィクトリア朝イングランドの商品文化』において、仮に「値札」がつけられていたら、一般の見物客は展示品がとて手の届か

ない商品であることをはっきりと認識して、会場でその商品に惹かれ結びつけられることはなかったとみている。むしろ価格の情報があたえられなかったからこそ、観客は展示品の属性に直接浴することになった (sensual attribute) のである。また水晶宮は、価格が固定されずにフロートしている競売の場としても機能し、そこでは誰もが厳しく品質を点検し、値踏みし、比較するところであった [Richards (1990), p. 38]。じじつ、出品者が会場で見物客に展示品の説明をすることは自由であったし、製品の用途や価格を明示したカード、パンフレット類もそこで配布されていた。本稿で利用する出品趣意書のなかには、そのような目的で作成されたと思われるものが数多くふくまれている。あたかもウェッジウッド社の注文制ショールームのように、確実なオーダーを見込める Trade Fair であったといえよう。実際にも、水晶宮は博覧会閉会后数日間にわたって出品者を招待する「内覧会」会場に供され、まさに商取引の場 (emporium) と化したのである [Auerbach (1999), pp. 120–1]。

III. イギリス商工業と万博の「商品」

まず展示品の分類をみてみよう。別掲の[表]にあるように、全展示品は出品者ごとに4つの大きな部門に分けられ、さらに30のクラスに細分化されている(第4の美術品部門だけは細分化されていないが、本稿では例外的な性格を有するこの美術部門は直接の対象としない)。4部門分割にはアルバート公の意向が強く反映していることはよく知られているが、彼はものが実際に作られる過程を正確に見物客にわからせることを重視した [Richards (1990), p. 32]。もっとも、これはロンドン博に始まったことではない。原料から中間財、そして製品に至るまで段階的に提示して教育的効果を上げることは、すでに十九世紀前半の各地での内国博覧会で試みられていた [Kusamitsu (1980), p. 79]。ここでは、これら展示品としての「商品」のなかから、ロンドン博本来の意図と目的に合致し、またイギリス商工業の実情と強みを示していると思われるいくつかの特徴をあげておこう。

(1) 商工業と科学の結合：素材部門

「商工業に自然科学者の(自然科学的)洞察を」あたえることは、この博覧会の主要な目的のひとつであった。分類全体も、主として商業の改善を目標として決定されたのである。そのことをよく物語っているのが、素材

部門の充実であろう。なかでもクラス I にその特徴が顕著に現れている。このクラスのイギリス国内からの出品者数は 474 であるが、これは全 30 クラスのなかでも屈指の数である。また、水晶宮内の展示とは別に、屋外のスペースに展示コーナーがあり、セメントやスレート、無煙炭や花崗岩などが配置されていた。カタログの解説には、イギリスの商工業繁栄の基礎である、“mineral wealth” を物語るものと、誇らかに記されている [Official Catalogue, vol. 1, p. 119]。

[表] ロンドン博展示品各部門の内容構成(右のアラビア数字は出品者数)

原材料部門

- I. 鉱物諸原料 474
- II. 化学・薬用原料全般 134
- III. 食材 136
- IV. 工業加工用・装飾用の植物性・動物性素材 119

機械部門

- V. 直接利用の機械類(諸車両、鉄道・水運用機械) 400
- VI. 各種用途機械・道具類(繊維加工、金属加工、食品加工等) 241
- VII. 土木工学・設計建築諸装置 189
- VIII. 造船および軍事技術(武器・装甲・防具類) 340
- IX. 農業・園芸用器具・機械類 258
- X. 物理学・気学・天文学機器類、楽器、測時器具、外科医療器具 563

工業製品部門

- XI. 綿製品類 64
- XII. 毛織物類(紡毛および梳毛織物) 337(XV を含む)
- XIII. 絹製品およびピロード 80
- XIV. 亜麻・麻製品類 98
- XV. 種々の交織製品(ショール含み、梳毛織物除く) XII に合算
- XVI. 皮革製品(馬具一式含む)、毛皮・羽毛・毛髪製品 280
- XVII. 紙類、文具、印刷具、装丁本 176
- XVIII. 捺染・染色繊維類 97
- XIX. 綴織(絨毯含む)、レース、刺繍、手芸・工芸品 292
- XX. 個人・家庭用各種装身具(帽子、靴下、手袋、下着等) 238
- XXI. 刃物類 43
- XXII. 鉄製品および金物類全般 628
- XXIII. 貴金属加工品および模造品、宝石類、趣向・奢侈品 122
- XXIV. ガラス製品 93
- XXV. 陶磁器 60
- XXVI. 家具および室内装飾(張り壁紙、張り子、漆器含む) 346

- XXVII. 建築・装飾用の鉱物性物質加工品（大理石、スレート、班石、セメント、人造石等） 127
- XXVIII. 動物性・植物性素材の加工物（これまでの分類に含まれないもの） 139
- XXIX. 種々の工業製品、小間物 283
- 美術部門
- XXX. 彫像、模型、塑像 508

（出所） *Official Catalogue*, vol. I, pp. 89–106.

公式カタログ第一巻の序文でカタログ作成の基本方針を説明したロバート・エリス (Robert Ellis) は、カタログの特筆すべき性格として、こういった商業の科学 (science of commerce) を体現していることをあげている。つまり、変化しやすく曖昧な取引の慣習用語を、正確かつ永続的な科学的表現に変える試みであると。たとえばクラス IV のある出品者は、おびただしい種類の木材の標本を展示するにあたり、そのラテン語の学名とともに、商業名、産地、そして最適の産業用途を併記している。つまりこのカタログが自然科学者にとってのみならず、産業・商業関係者にとっても長く価値を有するものであることに主眼がおかれた。これまではそのような情報が集約的なかたちで提供されていなかったため、産業的に価値を持つ新しい素材を導入したり、既知の素材の十分な供給を得たりするさいに、曖昧で非科学的あるいは局地的な用語で取引されていたからである [*Official Catalogue*, vol. I, introduction, pp. 86–87]。

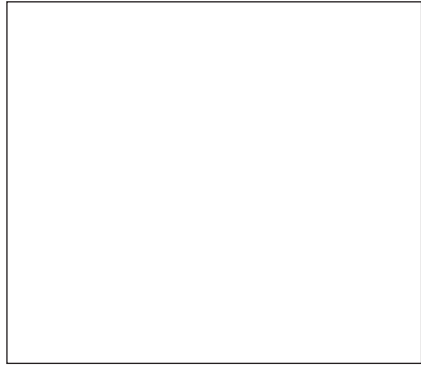
またダドリー (Dudley) の製鉄業者である S. H. Blackwell の記述は、自社の出品よりもイギリス全土の鉱工業の現状に焦点をあてたもので、主要な生産地ごとの溶鉱炉 (blast furnace) の設置数や近隣の石炭層の規模・炭質の一覧表、そして全英での鉱物資源の分布地図を掲げており、カタログの相当のスペースを割いている。一方、業界団体の共同出品というかたちで 170 の鉱物標本が、産地の情報とともに展示された。そしてカタログのクラス I の叙述は、世界各地の種々の鉱物資源の鉱質と規模を概説した論文により閉じられている [*Official Catalogue*, vol. I, pp. 150–159, 178–183]。

さらに商工業における原材料のいっそうの利用促進という目的に添って、カタログではたんに展示品の紹介にとどまらず、一般にあまり知られていない素材や、品質・コスト面でこれから積極的に利用することが望ましい素材については、その都度解説が付されている。出品趣意書には、特定の素材について、その品質を中心に解説したかなりの分量の小論文が付

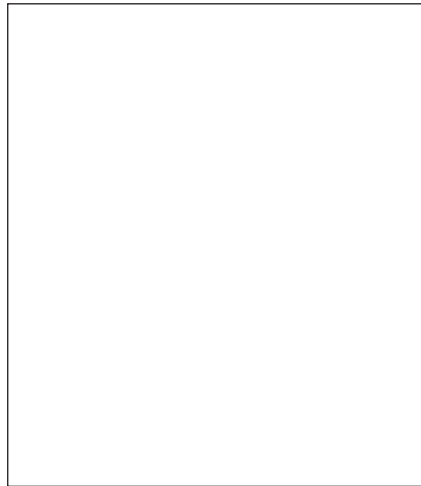
されているものがある。Luard, Beedham & Co.(商人)は、カーン石(Caen Stone、建築用石灰岩)などについての文章を添付しているが、カタログにも、簡単な説明があり、コストが安く、品質的にも優れた建材石であることを明記している。

クラス II は、化学および薬用系の素材である。全体に、展示品や出品者数は少なめで、出品趣意書も 10 しか残っていない。この部門が当時比較的新しい、成長途上の産業であることを物語っており、明礬、緑礬(copperas)、曹達、硫酸、アルカリ、シアン(青酸カリウム)といった、染色や漂白に用いるものが中心である。薬用素材は、植物の乾燥標本などで、数はそれほど多くない。趣意書で目を引くのは、ロンドンの輸入業者 Thomas Keating が出品した南米産マチコ(matico)である。これは 1830 年代末にリバプールの Dr. Jeffreys によって使用され始めたが、血止めなどのいくつかの絶大な効用があるとされ、医者による使用体験記が併記されている。クラス XXVIII で最高位のメダルとされる評議会賞(Council Medal)を獲得したグッタ・ペル

カ社(Gutta Percha Co.)が出品した多様なグッタ・ペルカ加工品も、そのようなものとしてあげられよう。同社の趣意書は、新素材が多くの業種で利用可能なことを詳細に解説している(カタログの解説でも新素材として急



[図 1] W. McNaught のダブル・シリンドー蒸気機関
(出所) *Official Catalogue*, vol. I, p. 213.



[図 2] R. Hornsby & Sons の可動蒸気機関
(出所) *Official Catalogue*, vol. I, p. 396.

速に輸入・加工量が伸びていることを強調している [Official Catalogue, vol. II, p. 784] 。

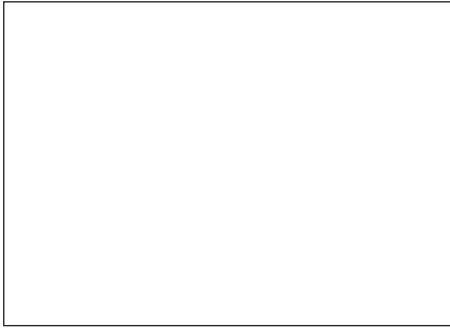
(2) 「最新テクノロジー」としての蒸気機関

機械部門の展示品のひとつの特徴は、いうまでもなく当時のイギリスの最新テクノロジーがそこに結集していることである。クラス V から X までには機械部門を構成し、その用途にしたがって 6 つのクラスに分けられているが、クラス V は、諸車両や鉄道・水運など直接利用に供される機械を展示している。機械部門はイギリスからの出品者が圧倒的に多い部門で（この部門ではやや特殊な要素をふくむクラス X を除く）、なかでもこのクラスは、総数約 500 人の出品者のうち 400 がイギリス人によって占められている。もちろんこれは展示品の性質上、海外からの輸送が容易ではない事実を反映しているが、この分野でのイギリスの優位を物語っているものといえよう。蒸気機関はクラス V のみならず、機械部門のなかでも依然としてイギリスのテクノロジーを代表するものとしての地位をあたえられた。ウォット (J. Watt) による高圧機関の発明以来半世紀以上を経過して、なお意欲的な技術革新が進行中だったことがわかる。その Watt 社による船舶のスクリュー・プロペラ用蒸気機関は最新の機能を備えた製品のひとつであろう。この機関は直径 52 インチのシリンダー 4 つを駆動し、700 馬力を発生したが、船舶用ということを考えて、極力軽量でスペースをとらないというメリットもあった [Official Catalogue, vol. I, p. 211]。

用途を考慮したさまざまなメカニズムを有する蒸気機関が目をはくが、回転動力への転換ひとつをとっても、この時点でもいくつかの方法が併存していた。グラスゴウの W. McNaught は、ダブルシリンダーをそなえた特許取得の蒸気機関を出品している。ひとつのシリンダーが高圧機関、もうひとつが伝統的な大気圧機関であり、両者を連動することで出力の向上と燃料の節約、運動の安定を実現したものである（図 1）。出品趣意書には、この機関を導入設置したことにより、そのような効果があったことを証言する、企業関係者による複数の使用体験記が寄せられている。なお、この機関がいまだにビーム式の原理によっている点も注目される。

(3) 農業部門の重視

クラス VIII の農業機械部門でも蒸気動力の積極的な利用がはかられている。頻繁に目につくのは、たとえばポータブル蒸気エンジンであろう。図



[図 3] J. Hodges & Son の安全ケトル
(出所) Prospectuses of Exhibitors, class XXII.

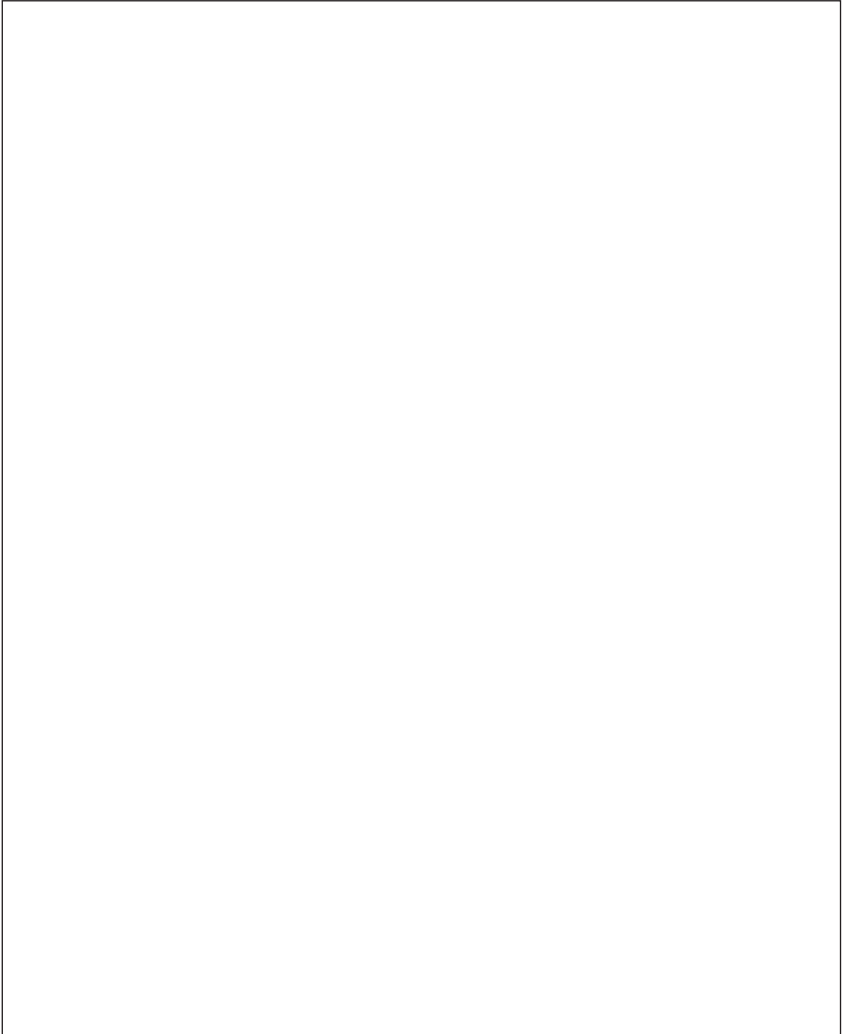
として、評議会賞を受賞した Hornsby 社のものをあげておこう(図 2)。こういったエンジンは、屋外に持ち出し脱穀機などの作業機にベルトで動力を伝達するために用いる。出力はほぼ 4 ないし 10 馬力、価格は 150 ないし 250 ポンドで、当然ながらほかの農機具類と比べるときわだって高価であった。これ以外に固定駆動のエンジンも売られており、振動型シリンドヤ

ームを用いたものなど、やはり駆動メカニズムはまちまちである。この時点までに開発されたあらゆるメカニズムを、用途に応じて可能なかぎり利用していこうとする熱意が感じられる出品といえるが、動力としての蒸気機関への偏重ぶりを読みとることもできよう。一方、原動力として馬を利用する脱穀機も多くの種類が出品されているが、これなどは、十八世紀以来炭坑や工場の動力として用いられてきたホース・ジン (horse-gin) のメカニズムを応用・発展させたものといえよう。

一般に農業・園芸用の道具・機械類の出品は、機械部門の目玉のひとつである。出品者の数は 250 あまりとさほど多いわけではないが、会場内の展示のスペースは最大規模であった。提出され(結果的に残存し)た出品趣意書の数も、クラス X について多く、しかもそれぞれは図解や詳細な説明、価格リスト、そして場合によっては各賞受賞経歴、使用体験記などを掲載したまとまった分量のものが多い。ロンドン博までに各地で開催された内国博覧会や農業祭などでの出品の経験を十分にふまえ、効率的かつ大がかりに売り込みをはかるノウハウの蓄積が際立っている。すでに数年前に穀物法が廃止されたことによって、農業部門においても競争的環境が整い、来るべきハイ・ファームの時期へ向けていっそうの生産性向上の努力が要請されていた状況、そしてそれに応じた巨額の資金の投入がなされていた状況を反映するものであろう。

(4) 多彩な金属製品

工業製品部門で(というより全部門を通じて)もっとも出品者が多く、趣



[図 4] W. Pearson & Co. の洗濯機
(出所) Prospectuses of Exhibitors, class XXII.



[図 5] J. & T. Masterman の酒用瓶詰め機・コルク装填機
 (出所) Prospectuses of Exhibitors, class VI.

意書の数と内容からいってもとりわけ出品にたいする熱意が感じられるのは、クラス XXII の各種金物類であろう。クラス XXI の刃物類は 43 というきわめて少ない出品者となっているが、これはシェフィールドの業者が分類上 XXII にふくまれることになったため、本来この両クラスは不可分の関係にある。このクラスの展示品はその多様さでも群を抜いている。供給面では、鉄や鋼をはじめとする素材部門の生産性とコスト面での優位、精密加工技術の水準を反映したものであり、需要面では日用品として、たとえば繊維製品よりもはるかに広い用途が開けていたことを示している。特徴的な展示品について、ほんの一例をみてみよう。

数の上できわめて多数におよぶ展示品は、ナイフ・食器類や剃刀などといった、日常生活用小物類である。なかにはユニークな主旨と用途を特徴とするものもある。たとえば、John Hodges & Sons 社による安全ケトルの出品(図 3)。これは銅製で、スチーム出口を横向きにし、同時に湯用つまみをつけることによって、やけどやお湯漏れを防ぐという、安全デバイスが施されたものである。今日でいう、耐久消費財にあたるものも出品

されている。洗濯機はいくつかの形状とメカニズムのものがあるが、うち W. Pearson & Co. のものをみてみよう(図4)。これは攪拌用スクリューのついた洗濯槽と、脱水用のローラーを組み合わせたものである。従来の洗濯棒(dolly)を使うやり方よりも、容易で洗濯物を傷つけないという特徴があった。また趣意書の欄外には、前夜のうちに水に漬け、汚れ場所には石鹼を付けておくこと、そして脱水ローラーではボタンを水平方向に入れること、などの注意書きがある。この洗濯機の場合、購入者としてジェントルマンやファーマー(おそらく富裕な借地農など)が想定されていたことも記されている。上下水用の各種パイプや接続部品、流し台やトイレといった、家屋水まわり用の器具も数多く出品されている。とくに接続部品(joint-connector)には、当時の金属精密加工技術の水準を反映した精巧な展示品も少なくない。

IV. 展示品の多様な方向性

つぎに、展示品全体を通じてみられるもうひとつの性格に目を向けてみよう。それはロンドン博の当初の意図とは別の所で、場合によってはそれに反するかたちで現れている、展示品の多様な方向性とでもいうべきものである。

(1) man-madeとmachine-made

近年のP. ハドソンらによる産業革命研究の大きな貢献は、手工業と機械工業、小経営と大工場、伝統的部門と近代的部門といったステロ化された区別を元に、それぞれ一方を産業革命の指標として固定する方法の不毛性を実証的に明らかにしたことである [Hudson (1992), pp. 27–29, 邦訳、46–49頁]。同じことをR. サミュエルは、イギリス産業革命期の経済は「現代抽象画の幾何学的規則性よりも、ブリューゲルやヒエロニムス・ボッシュとの類似性をより多く見いだす」と表現している [Samuel (1992), p. 39]。その一側面をごく単純化していえば、man-made と machine-made という、同じように重要な生産へのアプローチが並存していたことである。原材料部門の展示の主たる目的は、さまざまな原料を生産者に紹介し、その供給者を製造業者に結びつけることであつたが、展示された諸原料は、大規模な機械生産に使用されるものだけではなかつた。公式カタログのなかでさきのエリスも解説しているように、一方で人間の技芸によって種々多様な製



[図 6] Taylor & Sons の多機能船室用家具
(出所) *Official Catalogue*, vol. II, p. 730.

品に作り変えられる原料と、他方で、石炭のように ‘manufacturing power’ の源泉となる原料とに二分される [*Official Catalogue*, vol. I, p. 119]。あるいは有機経済(クラス IV に代表される)と無機・鉱物経済(鉄、陶器、ガラスなど)の併存といってもよい。アウアバックは、これは 1851年になっても、経済の大規模なリストラクチャリングはまだまだ完成していなかった(完成にはほど遠かった)ことを示しているとみている [Auerbach (1999), p. 98]。

公式カタログでもメカニズムが詳細に説明されている繊維産業の機械類や工作機械は、部品の細部に至るまで調琢を加えられた機械体系として存在しているが、それとならんで基本的に手工業的原理の改良に基づいた機械(道具)の出品も多い。ロンドンの J. & T. Masterman による、酒用瓶詰め機・コルク装填機などは、その一例であろう(図 5)。この装置は、迅速で液体を無駄にしない作業を可能とするものである。樽から注がれた液体はいったん瓶詰め機の酒槽 (vessel) に入れられ、つねに一定の水位を保っている。液はそこからサイフォンを通じて瓶に移されるが、こぼれたりしないように水量は正確に調節されている。瓶を引き抜こうとした瞬間に流れが止まり、空の瓶を補填するとまた流れ始める。同時に 4 本の瓶詰めが可能。コルク装填機は、ぶれのない垂直かつ効率的な作動と、装填直前にコルクをいったん圧縮する円錐状のチューブを通すことにより、通常のものより遥かにタイトかつ正確に装填することができる。厳密に区別することはできないが、しかし数の上ではこういった改良道具ともいべきもの

が過半を占めている。これは技術水準の部門的乖離というよりも、十九世紀なかばの時点で、生産にたいするさまざまなアプローチが並存していたことを物語っている [Auerbach (1999), pp. 104]。

(2) “Philosophical Instruments”

展示品全体のなかでひととき異彩を放っているのが、“Philosophical Instruments”をメインにしたクラス X である。“Philosophical Instruments”とは数学・物理学・天文学関係の器具、顕微鏡を指している [Kusamitsu (1980), p. 80]。おそらく展示品の多彩さでは、さきの金物部門とならび、このクラスは群を抜いているといつてよい。空間測定の道具(六分儀、望遠鏡、顕微鏡、経緯器)、機械的力学的諸力の測定器(検力器、計測軽量器)、天候観察器、そして、色・光・音・熱などについての多様な測定・実験器具など。これに楽器、時計、医療器具が加わる。563 という出品者数もやはり金物部門に次ぐもので、提出された出品趣意書の数は最も多い。“Philosophical Instrument Makers”を名乗るシェフィールドの Chadburn Brothers の趣意書には、光学ガラス研磨室の内部が描かれているが、室内には光学関係の器物はもちろん、種々の計測・実験器具から蒸気機関のモデルにいたるまで所狭しと並べられており、あたかも「科学工房」を髣髴させる。こういった専門的器材や薬品のひとつまみがすべて商品としてごく一般に取引され、また求められていたことも、この時期の商品文化のひとつの特徴であった。付与された評議会賞がもっとも多かったことも、このクラスの展示品の意義と将来性についての高い評価を示している。十九世紀前半の織工学院 (Mechanics' Institute) や巡回学校 (Itinerant Lecture) の科学教育の効果については評価が難しいが、科学的知識と関心が、広い階層で高い水準にあったことが、これらの出品からも推察される。

しかし、われわれはここから、なにを読みとれば良いのだろうか。たとえば、同じ機械部門でも、クラス V ないし VI とは違って、ここでは単純にイギリスの優位をいうことはできない。たとえばメダルを受賞した優秀展示品をみると、この分野ではフランスのほうがはるかに多彩であったし、趣意書の提出も積極的である。天文学、流体力学、気象学といった諸分野で、フランスが一頭地を抜いていたことはすでに認識されていた [Auerbach (1999), p. 124]。

またこのクラスでは電磁力を利用した時計や4つのメダルを受賞した電信、起電盤なども展示されている。ただ電磁力メカニズム自体、開発応用

の歴史はそれほど長いものではなかった。ロンドン博に先立つ博覧会において、「電気ショック体験マシン」が出品され、実体験した百戦錬磨のウェリントン公 (Duke of Wellington) も幼児のようになすべがなかったことや、ご婦人連はその部屋には気味悪がって近づこうとしなかったというエピソードが残っている [Kusamitsu (1980), p. 80]。電気にたいするこの時点でのイギリス業界の認識を物語るものであろう。じっさい、その可能性については良く知られ期待が持たれていたことが窺えるが、その一方で動力としての電気はほとんど重要視されていない [Auerbach (1999), p. 123]。いずれにしても、こういった展示品が楽器や外科医療器具と同じクラスに分類されていることは、便宜上の理由もあると思われるが、その意味するところについて考えてみる必要があるだろう。

(3) デザイン・装飾性

最後に展示品の装飾やデザインについて、ひとこと付言しておこう。芸術性にかかわる領域での議論は本稿の範囲を超えているし、また筆者にはそのような能力はまったく欠けている。ごくささやかな一例として、クラス XXVI の展示品をみてみよう。どれも総じて装飾過多の印象をあたえるが、性質上、この分野の出品にあたっては、装飾性が強く意識されていたのであろう。その一方で、船室家具のように、多機能を追求したものも出品されている (クラス VIII にも同種のいくつかの出品がある。グラスゴウの R. W. Laurie は、色々な形状の救命用浮き袋を出品している。普段は椅子やソファーとして利用したり、ベッドとして使ったりして、省スペースのための工夫を凝らしている)。アウアバックが多機能を追求しすぎた例としてあげている出品に典型的に現れているが [Auerbach (1999), p. 110]、装飾性を放棄したわけではなく、結果として中途半端で調和を欠いた外観といえる (図 6) (図 3 であげた XXII 部門の「やかん」も同じような傾向がある)。なおこのクラスでは 5 つの評議会賞のうち、フランスが 4 つを受賞し、イギリスはひとつもとれなかった。

そのアウアバックは、ロンドン博に示されたイギリス社会の亀裂を強調する。すなわち、ロンドン博は、社会のさまざまな集団が、イギリスがどのような国家であるべきかを掲げて争う戦場 (battleground) であったとみる [Auerbach (1999), p. 3]。そのような場となったのが、たとえば工業製品部門である。“Manufactures” に分類された品々は、数の上では展示品の中心となった。この膨大な商品群をひとまとめにして特徴づけることは困難で

あるが、全体としての展示ポリシーの混乱と対立がみられたことは、しばしば指摘されるところである。アウアバックはここでふたつの優先的価値の対立があったことを示している。いずれも経済学での通常の術語とはやや違った意味で用いられているが、ひとつは「労働価値説」とも呼ぶべきもので、生産にいかにも多くの労働が投入されたかに主眼を置き、また芸術的装飾性を重視する立場である。伝統的クラフツマンシップに代表される立場といってもよい。もうひとつは「交換価値説」で、需給と価格に基準をおく立場である。分業に立脚しマスプロ生産を展望した、新しい生産のシステムに則ったものである [Auerbach (1999), pp. 119–120]。当時の多くの評論家にとっては、この部門の展示品は、総じて芸術的な洗練度で難があり、施された装飾も装飾のための装飾となっており、表面的でスタイルの調和を欠いたものであった。展示品全体にたいするウィリアム・モリスの酷評ぶりはよく知られている。一方、製造業者の多くは後者の立場をとっており、イギリスの強みは価格競争でこそ発揮されるとみていた。いわく、美的な洗練と完璧さを求めるよりも、量とほどほどの質こそ我々のとるべき途であり、内外の膨大な市場に安い商品を提供することが、少数の高価な商品よりも、イギリスにとって大きな利益を生みはるかに有益であると [Auerbach (1999), pp. 113–4]。いずれにしても、このふたつの立場は、博覧会組織者の意図にもかかわらず、容易に交わらない平行線をたどったものとみるべきであろうか。

V. おわりに

ロンドン博の主要な目的のひとつは、さまざまな分野での社会的融合をはかることであった。すなわち、科学と商工業の結合、芸術と産業の調和、そして社会的秩序と階級統合といった目的である。展示のポリシーもこういった目的にそうものであることが企図されていた。

たとえば機械部門は、展示のスペースからしても、また公式カタログの記述の詳細度からいっても、そして出品者に付与されたメダルの数からすればなおいっそう、ひときわ重要度の高い部門であった。カタログに「イギリスの産業的成功と発展の主要な源泉」と称えられたこの部門の展示品は、性別年令階層を問わず大人気を博し、とくにクラス V および VI の大型の機械類は、地下に設置された蒸気動力との接続による稼働実演とともに、見物客の目に際立った印象をあたえたという。前述のように、機械部

門はイギリスからの出品者が圧倒的に多い部門であった。しかし実際は十九世紀なかばにおいても、こういった機械類は関係者以外にとってはなじみのあるものではなかった。くわえて、機械や産業にたいしては、いまだに偏見や不信感は根強かった。ロンドン博は、それがどれだけ果たされたかは別としても、産業の地位の見直しと社会的認知について啓発的機能を期待されていたのである [Auerbach (1999), pp. 107–108]。

また多くのクラスで、病弱者 (invalid) 向けにさまざまに工夫された椅子や寝台、馬車などの多くの展示品がみられる。そして、クラス XXVII においては労働者階級生活改善協会 (代表はアルバート公自身が務めていた) 出品の労働者用各種モデル住居プランが評議会賞を受賞し注目を集めた。いうまでもなくこういった事実は、あらゆる階層を水晶宮の商品世界に糾合しようとするひとつの方向性がはっきりと存在していたことを示している。

その一方で、ロンドン博においては、いくつかの側面で、利害や方向性の併存ないし対立が浮かび上がっていたことも明らかな事実である。指摘したような生産にたいするアプローチの多様性は、一例であろう。そういった多様性はそのまま水晶宮の商品世界に反映されていたのである。ヘンリー・コール (Henry Cole) に代表される博覧会の主催者側は、製造業者達の意向と役割を尊重しながらも、クラフツマンシップの喪失や洗練度の低下を憂い、“art manufacture” をモットーとした。つまり、利潤だけでなくそれをデザインやテイストと高次元で融合させることこそ、イギリス経済の長期的な改善と方向づけにつながるものとみていた。実際には、たとえば XXIII から XXVI までのクラスの展示品は、工業製品部門のなかでも芸術的装飾性が要求される分野であるが、いずれもフランスからの出品趣意書が多く、フランスの熱意と自信がうかがえる。そして展示品のみならず、展示の仕方にも趣味の良さと洗練度の高さが隔々にまで行き渡っていることは、すでにはっきり認識されていた [Auerbach (1999), p. 122]。その一方で、より厳密に規格化された部品による、機能性をこらしたアメリカ合衆国の工業製品が一般に強い印象をあたえたことも事実である。大量生産が質の追求か、あるいは両者の折衷か、ロンドン博は、イギリス産業の展望と未来像についての各層の懐いた不安と懐疑が集約される場であったことも否定できない。

いずれにしても、都合 10 万点にのぼる展示品のごく一部をとりあげた本稿では、性急な断案は差し控えたい。ふたたびリチャーズによれば、水

晶宮は商品文化の最初の記念碑であり、消費主義という神話のひとつの結晶点であった。十九世紀半ば以降のヴィクトリア朝社会では、商品はまさにマス・カルチャーを形成し、必需品や装飾品・奢侈品のみならず、いわゆる小物類(gadget や jigger という言葉が使われるようになった)、一方で機械類、メカニズム、種々の用途の建物、輸送手段へと、対象が飛躍的に拡大した。その一大転機を画したのが、ロンドン博だったのである。すなわち、水晶宮は、博物館であると同時に、最初の世界見本市(Fair)、最初のデパート、そして最初のショッピング・モールであり、世界の中心に商品が位置するようになるきっかけとなった出来事であった [Richards (1990), pp. 1-3, 17-20]。

万国博覧会の出品状況には、当時の生産や売り上げについての数字だけではつかめない動向が現れている。生産と流通・販売にかかわる人々が、なにを作りなにを売りたいと考えていたのか、また、一方で消費者の側が、あるいはひろく社会がなにを求めていたのか。万博はそういった動向を示すすこぶる正確なバロメーターといえよう。より新しく、高品質・高性能で、美しく、またより大きく(あるいは小さく)、そして多くの機能を備えていること。こういった展示品にみられる志向性は、出品者の「商品」に託するメッセージであったと同時に、消費者の懐く商品社会の未来像を反映したのもであった。そして水晶宮の商品に託された、異なったそれぞれの立場からの理想像はまた、十九世紀なかばのイギリス社会の的確な断面図を描いているといえるのではないか。本稿でその一端を示せたのであれば幸いである。

[付記]本稿は、2002年11月16日に大手前大学で開催された日本ヴィクトリア朝文化研究会第二回全国大会における報告に基づくものである。報告にあたりお世話をいただいた松村昌家先生(大手前大学)、高橋哲雄先生(大阪商業大学)、そして当日司会の労をとっていただいた井野瀬久美恵先生(甲南大学)に、この場を借りてお礼を申しあげたい。

参考文献

《資料》

The Great Exhibition of 1851: Prospectuses of Exhibitors (Michigan: UMI, 1991).
The Illustrated Exhibitor, a Tribute to the World's Industrial Jubilee; Comprising Sketches, by Pen and Pencil, of the Principal Objects in the Great Exhibition

of the Industry of All Nations (London: John Cassel, 1851).

Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851, 3 vols. (London: Spicer Brothers, 1851). 引用箇所では *Official Catalogue* と略記した。

Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851, 4 vols (本の友社、1996)

《英語文献》

Altich, Richard Daniel, *The Shows of London* (Harvard U. P., 1978). (R. D. オールテック『ロンドンの見世物 (I・II・III)』小池滋監訳、国書刊行会、1989～90)

Auerbach, Jeffrey A., *The Great Exhibition of 1851: a Nation on Display* (New Heaven, 1999).

Barton, Su, “‘Why Should Working Men Visit the Exhibition?’: Workers and the Great Exhibition and the Ethos of Industrialism”, Inkster, I. (ed.), *The Golden Age: Essays in British Social and Economic History, 1850–1870* (Aldershot, 2000), pp. 146–163.

Berg, Maxine, “From Imitation to Invention: Creating Commodities in Eighteenth Century Britain”, *Economic History Review*, LV, 1 (2002), 1–30.

Fay, Charles Ryle, *Palace of Industry: A Study of the Great Exhibition and its Fruits* (Cambridge U.P., 1951).

Greenhalgh, Paul, *Ephemeral Vistas: A History of the Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fairs, 1851–1939* (Manchester U.P., 1988).

Gurney, Peter, “An Appropriated Space: the Great Exhibition, the Crystal Palace and the Working Class”, Purbrick, L. (ed.), *The Great Exhibition of 1851: New Interdisciplinary Essays* (Manchester, 2001), pp. 114–145.

Hudson, Pat, *The Industrial Revolution* (London, 1992). (P. ハドソン『産業革命』大倉正雄訳、未来社、1999)

Kusamitsu, Toshio, “Great Exhibitions before 1851”, *History Workshop Journal*, issue 9 (1980), 70–89.

Kusamitsu, Toshio, “British Industrialization and Design before the Great Exhibition”, *Textile History*, vol. 12 (1981), 77–95.

Pollard, Sidney, *Peaceful Conquest: The Industrialization of Europe 1760–1970* (Oxford, 1981).

Richards, Thomas, *The Commodity Culture of England: Advertising and Spectacle, 1851–1914* (Sfanford, 1990).

Samuel, Raphael, “Mechanization and Hand Labour in Industrializing Britain”, in Berlanstein, L. R. (ed.), *The Industrial Revolution and Work in Nineteenth Century Europe* (London, 1992), pp. 26–43.

Tunzelmann, Nick von, “Technology in the Early Nineteenth Century”, in Floud, R.

& D. McCloskey (eds.), *The Economic History of Britain since 1700*, vol. 1 (2nd ed., Cambridge, 1994), pp. 271–299.

《邦語文献》

松村昌家『水晶宮物語』(リポート、1986)。

松村昌家『ロンドン万国博覧会と水晶宮』(本の友社、1996)。

見市雅俊「万国博の経済史」角山栄編『講座西洋経済史』第II巻(同文館、1979)。

吉田光邦『万国博覧会：技術文明史的に』(日本放送出版協会、1985)。

吉見俊哉『博覧会の政治学：まなざしの近代』(中公新書、1990)。

Commodities in Mid-Nineteenth Century Britain: A Glance at the Exhibits of the Great Exhibition of 1851

Kimio SHIGETOMI

“The Great Exhibition”, Thomas Richards mentions, “fostered what can be called a transparency of exchange: though it was not set up to sell things, it let things sell themselves.” (*The Commodity Culture of England: Advertising and Spectacle, 1851–1914*, Stanford, 1990, p. 38) This article tries to investigate some characteristics of commodity world of mid-nineteenth century Britain, by giving a glance to the exhibits of the 1851 Exhibition.

I sum up such characteristics in seven points. First four relate to the state of British industry and commerce and its superiority to other countries. Firstly, a number of exhibits of various raw materials symbolized one of chief purposes of this Exhibition: unity of manufacture, commerce, and science. Mineral wealth, especially, was a base on which British manufacture was to be prosper. Secondly, steam engines with different mechanisms were exhibited. Entrepreneurs and engineers may have exerted maximum effort to draw potentiality of this engine. The class of agricultural machines and tools, thirdly, was one of the most important in the Exhibition. Displaying space for this class in the Crystal Palace was the largest, and extant prospectuses of the exhibitors were outstandingly detailed in many cases. Fourthly, variety of the exhibits was most conspicuous in the metalware class. High level of precise manufacturing technique was reflected in many exhibits.

Next three points differ from the above mentioned, for these concern juxtaposition of contradicting principles. First of such examples was a juxtaposition of man-made and machine-made principle, or that of organic economy and inorganic one. Quite different productive method still coexisted. In class X, secondly, we are quite lost at the sight of the exhibits headed the title “philosophical instrument”, which included heterogeneous items, for example, pharmaceutical apparatus and musical instruments. Another juxtaposition is that of contradicting attitude to ideal industrial future. (The matter is discussed in J. A. Auerbach, *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*, New Haven, 1999, chap. 4) Which must be the aim of the manufacturing activity, artificial

refinement or mass-production of standard quality?

The Great Exhibition of 1851 was an epitome of commodity world of mid-nineteenth century Britain, which also reflected diverse, sometimes contradicting interests then held.

The Rhetoric of “Femininity”: Elizabeth Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë*

Chieko ICHIKAWA

Elizabeth Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë* possesses fictional and autobiographical elements. By describing Charlotte as an exemplary woman of the Victorian period, Gaskell aims at justifying Charlotte’s writing. Furthermore, Gaskell, a woman writer too, projects herself into her biography’s heroine and seeks to justify her own literary ambitions.

Reconstructing episodes displaying Mr. Brontë’s eccentric deeds, Branwell’s moral corruption and women as victims of patriarchy, Gaskell weaves her tragic life of Charlotte. Moreover, through the strategic use of quotations from Charlotte’s own words in which her femininity is shown, Gaskell denies that heroines’ claims for women’s rights in Charlotte’s novels written under the pseudonym of Currer Bell are in fact Charlotte’s. In this way, a contrast is shown between the Charlotte who cannot be emancipated from moral standards applied to women in her private life and the Charlotte who raises the woman’s issues through her works.

Gaskell’s purpose is to show that it is both her obligations as a woman and as a writer which give significance to Charlotte’s life. She further claims that Charlotte suffers mental deprivation when the harmony between her two obligations is lost due to her losing the opportunity to write. Representation of Charlotte’s “femininity” does not veil the fact that Charlotte was an author, but justifies it. Thus, “femininity” should be considered as rhetoric for honouring the female authorship. At the same time, it means that Gaskell, who projects herself into her heroine’s suffering, is also trying to justify her own literary ambitions. There-